

京都大学文学部

長谷川芳典

## はじめに

近年、日本語ワードプロセッサの専用機/ソフトが多数開発されているが、それらはいずれも「いかにスピーディな入力ができるか」という点を中心としてしのぎを削っている。スピーディな入力が可能となるためには、キーボードの配列をどうするか、ファンクションキーをいかにうまく配置するか、変換機能をいかに充実させるか、辞書をいかに豊富にするかなど、さまざまな点での改良が要求されよう。しかし、今述べたいいくつかの点に比べると、ユーザーによる単語登録機能の改良については、あまり重視されてこなかったように思われる。また、マニュアルの説明が分かりにくかったり、教育普及活動が充分でなかったりしたために、ユーザーの側でもこの機能を有効に活用できなかったというような問題があったように思われる。本稿は、これらの問題点を考慮し、スピーディな入力のためにいかに単語登録機能を活用するか、またその前提として、専用機/ソフトがどのように改良されなければならないかについて、提言を行なうものである。

## 単語登録機能とは

単語登録機能とは、よく使われる単語、専門用語、決り文句などを簡単な「よみ」によってユーザー専用辞書に登録しておき、必要に応じて呼び出す機能である。科学論文を執筆する時には、この機能は特に便利である。いかにワープロの辞書が充実していても専門用語まではカバーしきれないことが多いからである。この場合、ほんらいの「よみ」で登録してもよいが、頻繁に使われる語句の場合には、省略された「よみ」で登録しておけばより速く入力ができる。なお、口述筆記などの場合には、名詞よりも、「～でございます」とか「～と存じます」といった、決まりきった言いまわしを省略することが重要であると言われている。科学論文を執筆する場合でも、「である。」、「～と思われる。」、「たとえば」といった言いまわしは省略登録の対象にはなるが、やはり名詞の省略が中心となるであろう。ここでは、この後者の場合について論じることにする。

## 単語登録法の分類

それでは、登録するさいには、どのようなかたちで「よみ」を省略することができるだろうか。主なものを分類すると次のようになる。

【1】単語の先頭にくるひらがなで登録する。たとえば、「京都大学」は「き」、「行動」は「こ」、というように省略する。

【2】単語の先頭から2文字のひらがなで登録する。たとえば、「京都大学」は「きよ」、「行動」は「こう」、というように省略する。

【3】本来の「よみ」の一部で登録する。たとえば、「拝啓」を「はけ」、「前頭前野」を「ぜぜ」。

【4】単語を数字で登録する。たとえば、「掛布」を「31」、「岡田」を「16」。

【5】日本語にないひらがなの文字列で登録する。たとえば、「行動」を「んこ」、「である。」を「って」。

【6】ローマ字の子音で登録する。たとえば、「京都大学」を「KTDG」、「行動」を「KD」。

ただし、【4】と【6】の登録法は、機種/ソフトによっては禁止されている場合がある。「よみ」はひらがなでなければならないと制限している場合である。

### 単語登録機能の実際

それではユーザーは、実際にはどのようなやり方で登録しているのだろうか？

Table. 1は、3つの異なる研究室のワープロの共用システムディスクにおいて、「よみ」が省略されて登録されている単語が、それぞれ【1】～【6】のうちのどのルールに基づいて省略されたものであるかをまとめたものである。

研究室	「よみ」が省略された語の総数	登録法					
		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】
A	38	16	2	17	0	3	0
B	13	0	1	12	0	0	0
C	59	25	6	28	0	0	0

注：語句はすべて名詞であり、同じ語句が2つ以上の「よみ」で登録されている場合もあった。なお研究室A、Bは「キャノワード40」を、Cは「松」を使用している。

### 登録法の比較

どの登録法を用いるかはユーザーの自由であり、ここで押し付けるつもりはない。しかし、登録の仕方によっては、非常に能率が悪くなる場合がある。順に吟味してみよう。

まず、【1】は、Table. 1に示されたように、ごく普通に用いられているようであるが、たとえば、「木に登る」のつもりで「きに」と入力して変換すると「京都大学に」と出てきたり、「子が生まれる」が「行動が生まれる」に変換されたりして不便を感じる事が多い。同音異義語の多い日本語では、能率的であるとは言いがたい。

【2】は、【1】よりは多少改善されるであろうが、キータッチの数が増えるわりにはあまり能率は上がらないように思われる。

次に【3】もTable. 1に示されたようによく用いられている。しかし、「よみ」を省略するルールを一貫させておかないと、どのような「よみ」で登録したか忘れてしまったり、同じシステムディスクを使いながら、人によって異なる「よみ」で登録してしまうということがある。そうした混乱を避けるため、「登録単語一覧表」なるものがワープロの前に貼り出されることになるが、そのような表をいちいち参照しながら入力していたのでは、能率の悪いこと甚だしいと言わざるをえない。

【4】は、上述の背番号の例のように特殊なケースでは有効であろうし、また名前を誕

生年で登録しておけば、特定の年齢層をピックアップするのも役立つ。しかし、いろいろな用語や言い回しを登録する方法としては一般的とは言い難い。

以上から示唆されるように、省略形による登録法が有用であるためにはいくつかの条件を満たす必要がある。まず、キータッチの数が少なく済むこと。しかし、上述の【1】【2】の例のように、変換する際に別の同音異義語が現われてきたり、あるいはどのような「よみ」を入れたか忘れてしまいそうな省略ではかえって不便になる。これを改善したのが【5】、【6】の登録法であると言えよう。いずれも、できあいの辞書には重複する「よみ」が全く含まれていないので、変換した時にはユーザーが登録した語句しか呼び出されてこない。その分だけ、【1】や【2】に比べると、再変換キーを押さなければならぬという手間はぐっと減るはずである。このうち、【5】は「かな入力方式」の場合に、【6】は「ローマ字入力方式(ローマ字⇒かな変換入力方式)」の場合に適していると見えよう。

### ローマ字入力方式における最適な登録法とは

本稿では、かな入力がよいかローマ字入力がよいか、あるいはキーボードの配列をどうしたらよいか、といった問題に立ち入る紙面の余裕はない。ただ、とにかく現実には、英文タイプに慣れた人々を中心に、ローマ字入力を用いている人々が多いことだけは確からしい。となれば、この入力方式に適した登録法を開発し、普及させることは、重要な課題の1つであると言えよう。本稿の残りの部分では、ローマ字入力によりワープロを使用するケースに限って議論を進めることにする。さて、まず【6】による省略のルールを以下のように厳密化してみよう。

1° 漢字で表わされる語句は、それぞれの漢字をローマ字で表わした時の先頭にくるローマ字の列で登録する。

例：「京都大学」⇒KyouToDaiGaku⇒「KTDG」

「行動」⇒KouDou⇒「KD」

2° 母音が先頭にくる漢字は「X」または「L」などで表わす。

例：「英文」⇒EiBun⇒「XB」

3° カタカナなどを登録する時には、「aiueo」の部分をすべて省略したローマ字の文字列で表わす。

例：プログラム⇒PRoGURaMu⇒PRGRM

4° 以上のような方式で登録していくと、ローマ字からカナに変換される機能によってたとえば「KK」は「っK」、「KNPT」は「KんPT」というように自動的に変換されてしまう機種/ソフトがあるが、「っK」「KんPT」のまま登録しておく。

上述の登録法は、キータッチの数が少ないわりに同音異義語の現われる確率も小さくて済むという利点を持っている。これは、日本語は「あいうえお」以外をローマ字で表わす場合には、原則として2回、つまり「KSTNHMYRWGZDB...」と「AIUEO」を組合せて2回、キーを押さなければならないが、子音部分が13通りあるいは

「J F」などを含めるとそれ以上の情報を伝えるのに対して、母音部分は5通りの情報しか伝えないという特性に起因している。先に、「よみ」が省略されて登録されていた単語をTable. 1に示したが、これらを【1】、【2】、【6】の省略法で再登録した場合の、平均キータッチ数、同音意義語の出現率をTable. 2に示す。その結果は、【6】が合理的な省略法であるとの主張を裏付けるものとなっている。

T a b l e . 2

研究室		「よみ」を省略せずに 入力した場合			
		【1】	【2】	【6】	
A	キータッチ数	2.19	3.78	4.00	13.17
	(同音意義語出現率)	(47%)	(33%)	(0%)	(0%)
B	キータッチ数	1.77	3.62	4.77	14.00
	(同音意義語出現率)	(62%)	(15%)	(0%)	(0%)
C	キータッチ数	2.02	3.90	4.10	9.93
	(同音意義語出現率)	(58%)	(24%)	(0%)	(0%)
(個人)*	キータッチ数	2.18	3.62	3.04	7.68
	(同音意義語出現率)	(56%)	(24%)	(9%)	(0%)

注：ローマ字はヘボン式表記で入力した場合。語数は上から順に、36、13、59、45。なお、\*は筆者自身。

### システム側で改良すべき点

ローマ字入力は、(1)キータッチの数が多くなる、(2)キーボードの配列に合理性がない、(3)「QXL」などのような不必要なキーがある、といった点で、かな入力に比べて劣っていることは否定できない。しかし、上述のように、子音部分だけの「よみ」で登録するとか、「X」「L」などを別の目的に使うなどの工夫をすれば、かな入力以上の効力を発揮する可能性がある。しかし、現実には、ユーザーがローマ字入力をすることを想定していながら、「登録はひらがなの文字列に限る」といった制限を加えている機種/ソフトが少なくない(例えば、「松」など)。また、単語登録エリアが分割されているために、ローマ字で登録はできても、その数が著しく制限されているというような機種/ソフトもある(例えば、「キャノワード40」など)。あらゆる文字列で登録ができるよう、システム側の改良が望まれる。なお、ひらがなでしか登録できないような機種/ソフトでも「全文置換」の機能を活用することで【6】の代用が可能ではある。すなわち、「KD」・「JKDK」といったようにローマ字のまま本文の入力をしておき、書き終えた段階で「JKDK」→「条件づけ」、「KD」→「行動」というように、長い文字列から順に置換する方法である。しかしこれは、同音意義語があった場合などには不便であるし、「置換もれ」を起す恐れもある。1つの章に10個以上現われるような用語に限って、その場その場で使われるべき方法であって、あまり一般的とは言えない。